

運動部活動を通じた人間関係形成能力の育成

— 特別活動との共通性，差異性の観点からの検討 —

神戸松蔭女子学院大学 長谷川 誠

抄 録

本稿は、運動部活動を通じた生徒の人間関係形成能力の育成に関して、とくに主体性と協働性に注目し、特別活動との共通性と差異性の観点から検討することを目的とした。分析、検討の結果、部活動、特別活動を問わず、これら活動においては、周囲と協力しながら物事に取り組む力とされる協働性を養う場となっており、この点が両者の共通性であることがわかった。他方、主体性については、部活動を否定的に捉える者に対する質的調査からは、教師、生徒間の強い主従関係の中で、強制された自主性の下で形成されたものであるとの指摘がなされた一方で、特別活動は、教師や、クラスメイトとのほどよい距離感を保つことで、客観的に状況を判断し周囲と協力しながら物事に取り組むことで主体性を養うことができたと評価していた。この点は部活動と特別活動の差異性として指摘することができる。

最後に、部活動においても、特別活動と同様に、「弱い紐帯の強み」の下、緩やかな人間関係の中で、客観的に状況を判断し周囲と協力しながら物事に取り組むことによって、主体性や協働性を養うことができるものと論じている。

Key Words：運動部活動，主体性，協働性，弱い紐帯の強み

1. はじめに

本稿の目的は、部活動、とくに運動部活動と特別活動との共通性、差異性の観点から、運動部活動を通じた人間関係形成能力の育成について検討し、課題点を明らかにすることである。

2011年の「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方」の中で、社会的・職業的自立、学校から社会・職業への円滑な移行に必要な力の要素として「基礎的・汎用的能力が示された（文部科学省 2011）。その中の能力のひとつである「人間関係形成能力」については

「自己理解を深め、他者の多様な個性を理解し、互いに認め合うことを大切にして行動していく能力（自他の理解力）」や「多様な集団・組織の中で、コミュニケーションや豊かな人間関係を築きながら、自己の成長を果たしていく能力（コミュニケーション能力）」のと説明がなされている（国立教育政策研究所生徒指導研究センター 2011）。

そして2013年に閣議決定された「第2期教育振興基本計画」においては、変化の激しい社会を生き抜く力の養成が大きく掲げられ、今後の社会では、個人の自立と様々な人々との協働に

向けた力が、一層、必要となることを指摘した(文部科学省2013)。こうした考えは、2018年から開始された「第3期教育振興基本計画」においても引き継がれることとなり、計画では、「多様な個性・能力を生かして活躍する自立した人間として、主体的に判断し、多様な人々と協働しながら新たな価値を創造する力を、あらゆる教育段階を通じて身に付けることが求められる」と示されている(文部科学省2016a)。このように現在、教育を通じて育成される能力としては、自己理解、主体性や、他者理解、協働性に力点が置かれ、社会からも、こうした力を活かしながら集団、組織の中で円滑な人間関係を築ける人材の育成が求められているのである。

さて、学校教育現場に目を移すと、部活動は、教育課程外の取り組みではあるものの、生徒の主体性や協働性を養う重要な教育活動のひとつとされている。例えば、文部科学省は、運動部活動は生徒の自主性、協調性、責任感、連帯感などを育成することや、生徒のスポーツ活動と人間形成を支援するものとしている(文部科学省1998)。とくに運動部活動は「互いに競い、励まし、協力する中で友情を深めるとともに、学級や学年を離れて仲間や指導者と密接に触れ合うことにより学級内とは異なる人間関係の形成につながる」(文部科学省2013)と述べられているように、人間関係づくりに寄与するものと考えられている。この点について、今縮、朝倉らは中学校学習指導要領やその解説における運動部活動に係わる記述において、体力の向上や健康の増進をはじめ、責任感・連帯感の涵養、好ましい人間関係の形成などの文言が並ぶことは、運動部活動の教育的意義や教育効果を示していると整理している(今宿・朝倉ら2019 p.2)。

他方で、教育課程内においては主体性や協働性を育むことを目指す取り組みとして特別活動

があげられる。学習指導要領では、「様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決する」ことを通じて「資質・能力を育むことを目指す教育活動」と定めている(文部科学省2017)。また、育成する資質、能力として、多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについての理解や、自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして、集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成すること等があげられている(文部科学省2017)。そして、特別活動は生徒集団が編集主体となり、目標と計画に従って自主的・民主的に決定し、運営するものとされている(原 2007, p.66)。

このように部活動は課外活動であり、特別活動は教育課程内といった違いがあるが、部活動、特別活動、いずれも学校教育において重要な教育活動とされており、ともに生徒の人間関係形成能力を育成するために重要な取り組みであるといえる。

2. 先行研究の検討

部活動に関する研究は、これまでも多くなされてきた。例えば、西、中澤らは、部活動の加入者は、勉強への態度が良好であり、日常生活態度も良いといった部活動の教育的効果を明らかにした(西島 中澤ら 2006, pp.84-98)。また、部活動は目標の達成や他者との協働、感情のコントロールなどに関する資質、能力とされる社会情動的スキルにおいても一定の効果があるとの指摘もある(ベネッセ教育総合研究所2018)。部活動は、学力形成や人間関係形成能力の構築に有意義な活動とされており、長沼らは、部活動は任意参加であり教育課程外ではあるが中学、高校では重要な教育活動として捉え、力を入れている教師や学校が多いと述べている(長沼 柴崎 林 2018, p.9)。

しかし、一方で課題点も指摘されている。長沼は、学習指導要領から部活動の記述が一切なくなったことで自由度は高まったが、これにより活動時間の肥大化に際限がなくなった原因になってしまったと指摘している（長沼2018, p.20）。また、内田は部活動がグレーゾーンであることで、学校教育の一環であることを理由にして、生徒にも教員にも「強制」がはたらき、「自主性なのに強制される」ことになり、活動に対する管理が行き届かず「過熱」が止まらず、「自主的だから過熱する」していると論じている（内田2017, p.30）。加えて、部活動は、特別活動のように教育課程内に定めることができない中、重要な教育活動とされつつも、結局のところ、教師がボランティアで関わることで維持されていることも指摘しておかなければならない¹⁾。つまり、部活動は学校教育の一環ではあるが、教育活動上の位置づけが曖昧であるがゆえに、むしろ強制性がともなう自主性のもと過熱が際限なく強まっている側面があるといえる。

このような長沼、内田の指摘は非常に重要である。なぜならば、部活動を通じて育成される人間関係形成能力は、強制や過熱という特殊な環境下で形成されている側面があり、かつ、こうした能力が生徒の評価の対象となる（内田2017, p.49）ことで、教員、生徒ともに負担を強いられながら、より一層部活動への取り組みが過熱するという循環を作り出していると考えられるからである。

さらに、文部科学省の「高大接続システム改革会議」がまとめた最終報告では、2021年度から開始される新たな大学入試制度の個別の入学選抜において、多様な評価方法を工夫しつつ、「主体性を持って、多様な人々と協働して学ぶ態度」についての評価を重視し、調査書の活用等、具体的な方法についての言及があり、その評価方法に「各種大会や顕彰等の記録、資

格・検定試験の結果」との記述がある（文部科学省2016b, p.42）。もちろん、今後の社会を生き抜くためにも、主体性や協働性が重要な能力であることは間違いなく、評価対象になることには異論はない。しかし、自主性は、大切なものとして尊重されるが、他方でそれは強制性を覆い隠す役割ももっており、それゆえ部活動は（さらには運動会の組体操も）、強制性を伴いながらも、自主性という名のもとに肥大化してきた（内田2017, p.46）という事実を看過することはできない。

これらをふまえると、今後、自己理解や主体性、他者理解や協働性を育成する教育活動が一層重視される中で強制性が働きやすい部活動を通して形成される人間関係形成能力を単純に支持することには、いささか疑義が残るのである。

そこで本稿では、中学、高校時の部活動に対する取り組みや、部活動と同様に生徒の人間関係形成能力を育むことを目的としている特別活動の取り組みに関する調査を実施し、部活動よりも特別活動を重視する意識に注目した。そして、部活動と特別活動との共通性、差異性の観点からの検討を通して運動部活動を通じた人間関係形成能力の育成に関する課題点を明らかにしたい。

3. 研究方法

本稿では、アンケート調査（以下、量的調査）、インタビュー調査（以下、質的調査）による混合研究法を用いて分析を進めることとする。混合研究法の中でも量的調査の結果を説明する目的で質的調査を行なう「説明的デザイン」²⁾を分析手法として採用した。量的調査は、対象となった大学からの協力を得て、授業内で記名式調査用紙を配布し、その場で回収をした。実施時期は、2017年9月～2018年1月。対象者は大学生554名（男性305名、女性249名：

内訳は1年生男性175名、女性193名・2年生男性130名、女性56名)となった。質問項目は、「中学、高校時代の部活動所属の有無や熱心に取り組んだ取り組み」「部活動所属と熱心に取り組んだ事柄の関係と各項目の自己評価」についてである。各項目の自己評価の内容は、「1. 主体的に・自主的に物事に取り組めるようになった」(以下、1. 主体性)、「2. 周囲と協力し合って物事に取り組めるようになった」(以下、2. 協働性)、「3. 他者の個性を理解できるようになった」(以下、3. 他者理解)、「4. 自分のできること、したいことがわかるようになった」(以下、4. 自己理解)、である。

調査対象は3大学の学部系統は、経済系、文学系、農学、情報に限定し、体育学やスポーツ系の分野と、スポーツ推薦入試等、スポーツ活動を進学条件している者は除外した。理由は、調査対象者を学びの分野やスポーツ活動に対する関わり方に偏りがないようにするためである。また、学力レベルは大手予備校が示す入学難易度レベルで42.5以下に位置している(河合塾 2018)。

質的調査は6名を対象とし、いずれも半構造化面接法(1時間)を採用した。調査は2018年2月に実施し、結果については、フィールドノート(以下、FN)への記述から引用したものである。対象者については、本稿が、部活動を批判的に考察することをふまえ、部活動よりも特別活動を重視する意識に注目していることから、量的調査後に、これらに該当する者から了承を得られた、中学、高校時に部活動に所属しながらも特別活動に熱心に取り組んだと回答した者(男子2名、女子1名)と、中学時に部活所属をしていたが高校時には部活動に所属をしていなかった者(男子2名、女子1名)の計6名を選定した。そして、量的調査、質的調査の実施にあたっては、個人が特定されることはないことや、調査の途中でも本人の自由意思で取りや

めることが可能なことを伝え、論文への記載についても本人の了承を得た上で実施した。今回、質的調査の対象者が6名と少ないサンプル数であることを考えれば、得られた結果は、必ずしも全体の傾向を示すものではないことは付言しておきたい。また、部活動よりも特別活動を通じて人間関係形成能力が育成されたと考えている者を対象としており、部活動を批判的に捉えた意見が多かったことにより、結果についても、部活動の負の部分が鮮明化することとなった。その意味では、データの偏りに対する懸念は生じるものであり、本稿の限界点として指摘おく必要がある。しかし、かれらの意識や考え方を明らかにすることは、部活動を通して育成される主体性や協働性の捉え方や、育成プロセスにある課題を浮かび上がらせる重要な手がかりとなり、今後の部活動研究、特別活動研究の一助になると考えている。

4. 結果と考察

4-1 量的調査

表1 部活動所属割合(運動部、文化部、無所属)

	中学		高校	
	度数(N)	構成比(%)	度数(N)	構成比(%)
運動部	436	78.7	365	65.9
文化部	92	16.6	116	20.9
無所属	26	4.7	73	13.2
合計	554	100.0	554	100.0

まず、調査対象の属性についてみると、運動部は(中学78.7%、高校65.9%)、文化部は中学16.6%、高校2.9%。無所属は中学4.7%、高校13.2%となった。次に、中学、高校時代に最も熱心に取り組んだ活動についての結果である(表2)。中学、高校ともに部活動が最も高く、5割以上の者が部活動を熱心に取り組んだと回答

表2 中学、高校時代に最も熱心に取り組んだ活動について

	中学		高校	
	度数 (N)	構成比 (%)	度数 (N)	構成比 (%)
学級活動・ホームルーム活動	24	4.3%	30	5.4%
生徒会活動	23	4.2%	23	4.2%
学校行事	187	33.8%	189	34.1%
部活動	320	57.8%	312	56.3%
合計	554	100.0%	554	100.0%

表3 部活動所属と中学、高校時代に熱心に取り組んだ活動について

	中学		高校	
	度数 (N)	構成比 (%)	度数 (N)	構成比 (%)
①運動部所属×部活動	271	48.9	266	48.0
②文化部所属×部活動	49	8.8	46	8.3
③部活所属 ×特別活動	207	37.4	169	30.5
④部活無所属×特別活動	27	4.9	73	13.2
合計	554	100.0	554	100.0

している。次いで、中学、高校ともに学校行事となった。これらの数値について学級活動、ホームルームと生徒会活動、学校行事を特別活動（中学42.2%、高校43.7%）とし、以下、部活動と比較検討を行なうこととする。

表3は、中学、高校ともに運動部に所属して熱心に取り組んだ事柄を部活動とした者を「①運動部所属×部活動」（以下、①）、文化部に所属して部活動とした者を「②文化部所属×部活動」（以下、②）、運動部、文化部に所属し特別活動とした者を「③部活所属×特別活動」（以下、③）、そして、部活動無所属だった者を「④部活無所属×特別活動」（以下、④）とし、度数と構成比を示したものである。中学、高校ともに①の割合（中学48.9%、高校48.0%）が多いものの、③の割合をみると中学37.4%、高校30.5%になり、部活動所属の者においても、特別活動に熱心に取り組んだと回答した者が一

定数いることがわかった。

次に、表3の区分を基に、中学時代において、部活動所属の有無と熱心に取り組んだ活動の状況によって主体性や協働性等に関する自己評価に差があるか検証をするために1要因の分散分析を行なった。結果は次のとおりである（表4）。「1. 主体性」「2. 協働性」「3. 他者理解」「4. 自己理解」のすべての項目において、有意な差は認められず、部活所属の有無や組み合わせの内容によって自己評価に違いはみられなかった。全体的な傾向としては、「2協働性」が他の項目よりも高い数値を示した。

続いて、表3の区分において、「④部活無所属×特別活動」を、中学時に運動部あるいは文化部に所属していたが高校時は無所属だった者を部活無所属とし、部活動所属の有無と熱心に取り組んだ活動の状況によって主体性や協働性等に関する自己評価に差があるか検証をするため

表4 分散分析の結果 (中学校時代)

		①運動部所属 ×部活動		②文化部所属 ×部活動		③部活所属× 特別活動		④部活無所属× 特別活動		F値	多重 比較
		M	SD	M	SD	M	SD	M	SD		
1	主体的に・自主的に物事に取り 組めるようになった	3.10	0.81	2.94	0.85	3.06	0.87	2.92	0.84	0.77	n.s.
2	周囲と協力し合って物事に取り 組めるようになった	3.24	0.77	3.14	0.74	3.21	0.83	3.00	0.85	0.82	n.s.
3	他者の個性を理解できるよう になった	3.10	0.79	2.96	0.68	3.11	0.83	2.92	0.74	0.86	n.s.
4	自分のできること、したいこ とがわかるようになった	2.98	0.91	2.80	0.82	2.87	0.93	2.73	0.87	1.24	n.s.

表5 分散分析の結果 (高校時代)

		①運動部所属 ×部活動		②文化部所属 ×部活動		③部活所属× 特別活動		④部活無所属× 特別活動		F値	多重比較
		M	SD	M	SD	M	SD	M	SD		
1	主体的に・自主的に物事に取り 組めるようになった	3.66	0.58	3.50	0.81	3.15	0.87	3.17	0.87	19.14	*** 1>3.4 2>3
2	周囲と協力し合って物事に取り 組めるようになった	3.69	0.55	3.65	0.64	3.25	0.82	3.30	0.85	16.72	*** 1.2>3.4
3	他者の個性を理解できるよう になった	3.67	0.55	3.61	0.65	3.20	0.80	3.21	0.88	20.17	*** 1.2>3.4
4	自分のできること、したいこと がわかるようになった	3.55	0.67	3.35	0.77	3.05	0.87	2.94	0.91	19.72	*** 1>3.4 2>4

*** $p < .001$

に1要因の分散分析を行なった。結果は次のとおりである(表5)。なお、中学時、高校時ともに部活無所属だった10名は除いている。

まず、すべての項目において有意差が認められた。「2. 協働性」「3. 他者理解」については①と②が③と④より有意に高い傾向がみられた。しかし、①は、その他の項目においても③、④より有意に高かったのに対して、②については、「1. 主体性」は④と、「4. 自己発見」は③と有意差がみられなかったのである。つま

り、全体としては、部活動に所属し部活動を熱心に取り組んだ者の方が、部活所属の有無に関わらず特別活動を熱心に取り組んだ者より、主体性や協働性等の各項目の力を養うことができたことと評価している結果となったが、その中で文化部については、特別活動と比べても自己に関わる評価に差が生じない結果がみられたのである。この点については、文化部活動の存在意義や役割が各教科や特別活動などの教育課程内の学習において文化芸術体験をした後、それに生

徒が自ら継続的、発展的に取り組む場として文化部活動を位置づけることができること（林2018, p.52）。そして、国語や芸術を中心に、複数の教科との対応関係が明確であり、各教科等での学習内容が文化部活動とつながり、発展的な学習機会となっている（林2018, p.55）といった指摘もあり、文化部と特別活動や他教科との関連性の高さが背景にあると考えられる。

中学、高校を比較してみると、今回は大学生に対する回顧調査であることを考慮しなくてはならないが、全体的に高校の各項目の数値が高くなっていることは、中学より高校の活動が主体性や協働性等の育成に強く影響していることを示している。加えて、中学同様、高校でも「2. 協働性」「3. 他者理解」が他の項目と比べてそれぞれ高い傾向にあるのは特徴的といえ、部活動や特別活動が、周囲と協力しながら物事に取り組む力を養う活動となっている点は、両者の共通性といえる。

また、③、④の者も中学に比べると高い数値を示していることは、高校においては部活動だけでなく特別活動でも主体性や協働性を育成することにつながっていると考えることもできる。その中で、高校の①の数値が高いことは注目しなくてはならない。なぜならば、中学では有意差がみられなかったが、高校では同じ部活動に熱心に取り組んでいる文化部の②が③や④

と比べて項目によっては違いを示していない一方で、中学時は他の同程度であった運動部が、高校では他と比べて際立って高い背景には何か特有の事柄があると考えられるからである。

では、こうした結果をふまえて、部活動より特別活動に熱心に取り組んだ③、④の者へのインタビュー調査を通して、部活動が抱える課題について探っていくこととする。

4-2 質的調査

ここから質的調査の結果についてみてみたい。調査対象は表6に示している。では、詳細をみていくこととする（下線部は筆者による）。

調査実施日（FN：2018年2月9日）

質問：部活動ではなく特別活動を熱心に取り組んだと答えたのはなぜですか？

A：部活は自分を高めることにはなったけど、なんか世界が小さくなってしまっている気がして①、部活の友達ほどつながりは強くないけど、クラスの皆と体育祭や文化祭に取り組んだ時の方が、自分にプラスになったと思いました。

C：なんかわかる気がする。部活って充実はしているけど、時々、自分たちの世界に閉じこもっている感じがした②。長い時間を部活にかけるから、部活の取組みを正しいと

表6 インタビュー調査の対象者の概要

対象者	性別	中学部活		高校部活		備考
A	男性	運動部	野球部	運動部	野球部	中高ともに主将。中学時には全国大会出場
B	女性	運動部	柔道部	運動部	柔道部	戦績は高校時の県大会ベスト4が最高
C	男性	文化部	吹奏楽部	文化部	吹奏楽部	高校時には全国大会に出場
D	男性	運動部	サッカー部	無所属	—	高校は進学コースだったため、部活動はしなかった
E	男性	運動部	バドミントン部	無所属	—	元々高校では部活をするつもりはなかった
F	女性	文化部	美術部	無所属	—	部活の雰囲気にも馴染めず、高校では無所属にした

思い込んでいるところもあった③。

B: 確かに、部活動は自分を成長させてくれると思うところはあるけど、修学旅行とかの企画を考えたり、グループ決めをしたりするときは、普段あまり話をしない人とかの意見を気にしながら自分を主張しすぎないように、協力的に取り組んでいたのも印象に残っている④。

まず、中学、高校ともに部活に所属しながらも、特別活動を熱心に取り組んだと回答した3名に、なぜ「部活動ではなく特別活動を熱心に取り組んだと答えたのはなぜか？」について質問をした。全体として部活動自体は肯定的に捉えているものの、一方で、部活動が自身の視野を狭めていることや(下線部①, ②)、特別活動に比べて、つながりが強すぎる人間関係のあり方や、意識のどこかで部活動は正しいものと思い込んでいることに対して違和感を覚えている(下線部③)。他方で、特別活動はクラスメイトという一定の距離感の中で、物事を判断したり作業を進めたりすることが、主体性や協調性を高めることにつながっていたと認識をしていた(下線部④)。

質問: 部活動と特別活動の取り組みを比べてどのような考えを持ちましたか?

E: 高校になって部活から離れて思うのは、部活ってとても思い込みが激しいことかな。中学の部活では一番自分を成長させる活動だとか、社会に役立つ力を身に付けることができると信じていたけど、別の活動でもいろんな力を身に付けることはできると思った⑤。

D: 中学の時は強いチームにいたから、心身ともにすごく鍛えられたし、頑張った分だけ内申書も良かったと思う。でも高校で部活をしている友達が、部活がすべてと話して

いるのをみていたら、なんか違うかなとも思った。高校ではクラス代表をしましたが、自分で考えたり、クラスの他の人たちのことを考えたりすることが勉強になった⑥。部活も良いけど、部活がすべてではないと思う。

F: 私は中学の部活の雰囲気嫌で、高校ではしなかったけど、普通に生徒会とかをして充実していたし、自分たちで決めないといけないことや、先生や生徒の人たちの話をしっかり聞くことの大切さも勉強できたから⑦、部活をしなくても良かったと思っている。

次に、中学時は部活動に所属していたが、高校では無所属になった3名に対して「部活動と特別活動の取り組みを比べてどのような考えを持ちましたか？」について質問をした。その結果、部活動を肯定的に捉えつつも、特別活動の各種への取り組みによって、部活動と同程度、あるいはそれ以上の意義があると感じていた(下線部⑤, ⑥)。また、部活動に対して否定的な考えをもちながら、高校時に生徒会活動に携わることで、様々な力を身に付けることができたと評価をしている(下線部⑦)。そして、同じ部活の友人が、部活動への強い想いを語っていることに違和感を覚えていることは、前述の中学、高校で部活に所属していた者と同じ傾向といえる。

質問: 主体性、協働性を養うために必要な事は何だと思いますか?

C: やっぱり、部活でも他の活動でも、学校で行われる事に対して、積極的に取り組む考えや姿勢が大切だと思う。

D: 僕もそう思います。結局、勉強でもそうですが、周りから強制的にさせられるのではなく、自分で考えて行動する事が重要だと

思います。中学のサッカー部の時は、自分でしているつもりでしたが、今思うと、選手が考えている雰囲気をつくりながらも、結局は、先生がやりたい練習や試合の内容になっていましたから⑧。

E: そうなんだよね。結局、自分たちで考えろって言われたけど、例えば、疲れがたまっているから、休みたいと言ったら、先生から、そんな弱気はダメだと怒られた⑨。本当に休養を取った方が、パフォーマンス力が上がると思ったんだけど。そう思うと、本当に主体的に取り組めたかはわからないかも。

F: 私の思い込みかもしれないけど、スポーツ系の部活の人って、なんか部活にすべてをかけてます、っていうオーラがすごくあって⑩、こっち側からみたら⑪、なんか怖かった。実際、運動部の人たちをみても、先生が決めたことはすべて正しいと信じて、結局、やらされているんだなと思えた⑫。

A: 僕は少し違うかな。(・・・(沈黙)・・・)
野球のおかげで高校にも行けたし⑬、体育祭とか修学旅行の企画も良いし、どちらが良いとか悪いとかではなく、どちらも大事だと思う。

B: そう。たしかに部活は少し強制的だったかもしれないけど自主練習の時間もあったし、部員同士でミーティングもしていたことを考えて一致団結する大切さも学んだかな⑭。

最後に、「主体性、協働性を養うために必要な事は何だと思いますか？」について質問をした。全体としては、物事に対して強制的ではなく、自らの意思で取り組むことが主体性や協働性を養うために必要なことであると述べている。その中で特徴的なのは、部活動に取り組ん

でいた時は、主体的に取り組んでいたと思っていたが、実際は先生の指示が強かったと述べ(下線部⑧, ⑨, ⑫)、選手自身も先生の指示を疑いもなく信じていたことを振り返っていた。また、部活動から離れ、なおかつ文化部からみて運動部の雰囲気が異様に感じていたことを指摘していた(下線部⑩)。とりわけ、自分たちを「こっち側」と呼び、自分たちと運動部は対極にあると意識していた(下線⑪)。とはいえ、こうした部活動に対する否定的な発言が展開されている中でも、部活動が進路選択に有利になっていたり、部活動の良い側面を強調したりと、部活動を支持するコメントもみられたのである(下線部⑬, ⑭)。

今回の6名のうち高校では部活動をしていない3名、D、E、Fから部活動に対して否定的な意見が出ることは考慮しつつも、かれらの意見は極めて重要な意味を持つ。それは、かれらが部活動に所属している時(中学時)は、心身ともに部活動に没頭することで自分を高めるために有効な活動であったと捉え、主体的に取り組んでいたとの振り返りがなされていよ。しかし、高校で無所属になり部活動と距離を置くことで、それは部活動が持つ特異な文化の中で形成された意識であったと捉え直している。量的調査において高校で運動部に所属し、部活動に熱心に取り組んだ者たちの数値が他より際立って高いことも、こうした意識が働いていることも十分に考えられる。

これらに加えて、A、B、Cのように高校で部活動に所属しつつも、そのような部活動が持つ文化に違和感を覚え、特別活動の取り組みを有意義に捉えていた意識からも、部活動、とくに運動部が抱える課題がみえてくる。それは、運動部において指導者である教師や、他の部員との間にある「(強制性を伴う)強いつながり」がもたらすマイナスの影響である。この「(強制性を伴う)強いつながり」を重んじることで

周囲との同調性を求められ、自主性の下、活動を強制され過熱し大きな負担を生じさせていることが考えられる。これらは、長沼、内田の指摘と符合する点といえる。それに対して特別活動は、教師は前面に出ず、対等な人間関係の中、生徒相互が一定の距離感を保つことで、主体性や協働性を育むことにプラスの影響を与えていた。

以上が量的調査、質的調査の結果である。次節では、これらをふまえて検討を進めていくこととする。

5. 総合考察

本稿では次の点が明らかになった。

1点目は、学校教育における主体性、協働性の育成の現状をみると、部活動、特別活動問わず、全体的に中学より高校が効果的であると考えている中で、中学では有意差がみられなかったが、高校では有意差が認められ、部活動に所属し、かつ部活動を熱心に取り組んだ者の方が、部活所属の有無に関わらず特別活動を熱心に取り組んだ者より、主体性や協働性を養うことができたと評価していること。

2点目は、中学時は特別活動を支持した者と同程度であった運動部が、高校では他と比べて際立って高い理由には、運動部の活動において理不尽なことがあっても、それを受け入れることにより、部活動に主体的に部活動に取り組んでいるといった思考を持つ点が指摘できた。

3点目は、部活動、とくに運動部は教師や部員とのつながりが強いことで、自身の視野を狭めていることや、部活動は正しいものと思いつまむ状況を作り出すのに対して、特別活動は、教師の存在を感じさせることなく、クラスメイトとの一定の距離感を保ちながら物事を判断したり作業を進めたりすることが、人間関係形成能力を高めることにつながっている意識があったこと。

以上をふまえて、さらに検討を進めてみたい。調査を通してみえてくるのは、生徒の人間関係形成能力を育成する活動として、部活動、特別活動ともに有効であることをおさえつつも、やはり、現状としては、運動部所属者の部活動に対する評価の高さである。一方で、文化部についても、特別活動よりも高い評価を得たものの部活動所属の有無に関わらず、特別活動と同程度の効果があると認識している者もいた。しかし、部活動所属ながらも特別活動を支持する者や、中学では部活動所属であったが高校では無所属となった者に対する質的調査からみえてくるのは、運動部に対する否定的な意見である。そこには運動部の文化ともいえる教師や部員との強いつながりがもたらす窮屈さであり、閉鎖的な組織の中で依然として残る教師と生徒の主従関係である³⁾。調査結果においても、中学、高校ともに運動部所属の者が、主体的に取り組んだつもりでも、最終的には教師の指導により、自分たちの意見が通らなかったことを振り返っていたことや、そうした光景をみて怖さを感じていた。

また、運動部においては、生徒が教師の管理下にいることや、中学の部活動が高校進学の際、有利になったこともうかがえた。つまり、生徒自身が、部活動を通じて主体性や協働性を養うことができたと評価していたとしても、こうした部活動に対する肯定的な意識には、教師、生徒間の強い主従関係の中、強制された自主性の下でつくられているといった課題が含まれているといえる。これに対して、特別活動は、教師や、クラスメイトとのほどよい距離感を保つことで、客観的に状況を判断し周囲と協力しながら物事に取り組むことで主体性や協働性を養うことができたと評価していた。この点は部活動と特別活動の差異性として指摘することができる。

こうした状況を整理する上で重要な示唆を与

えるのが、アメリカの社会学者マーク・グラノヴェッターの「弱い紐帯の強み」の考えである。この理論は、「特定の集団内部に集中する傾向にある強い紐帯よりも、弱い紐帯の方が異なる小集団の成員同士を連結することや、有益で新規性の高い情報をもたらしてくれる可能性が高い」とするものである（Granovetter, M, S 1973）。この点について、大岡は「集団内の連帯感や凝縮性を高める点で優位な強い紐帯に対し、分化した社会の結合においては弱い紐帯が大きな役割を果たすとの結論を鮮やかに導きだした」と論じている（大岡 2006, p.156）。蘭、高橋も特別活動の学級活動における教師の指導のあり方として「弱い紐帯の強み」について言及しており（蘭 高橋 2014, p.235）、学校教育活動においても一定の示唆を与えている。但し、特別活動が部活動よりも教師と生徒間、生徒同士の結びつきの度合いが弱いとは必ずしも言い切れないことは付言しなくてはならない。紙幅の都合上、この点の議論は次の機会とした。

しかしながら、部活動の運営実態における時間的、空間的な強制性や閉鎖性、過熱度の高さを背景におけば、特別活動は、運動部のような閉鎖的で凝集性の高い集団というよりも、普段はいくつかの小集団に分化しているクラスメイトが結合し、教師は生徒と一定の距離を保つ意識を持って活動していると捉えることができる。蘭、高橋は、こうした弱い紐帯の強みを支持することに、創造的な活動をするためには教師が生徒に主導権を委ねることであると指摘する（蘭 高橋2014, p.236）。また、越、高橋は、学級全体に開かれた級友たちのネットワークが作られ、さほど親密でなくてもある程度の関わりや関与が維持されている学級では、一般的な信頼が高く、お互いの主体性や責任の信念を信頼し、コミュニティ感覚をもって活動を行うことができると論じている（越 高橋 2019, p.334）。

この点から前述の第3期教育振興基本計画における「多様な人々と協働しながら新たな価値を創造する力」をみると、調査結果でも、協働性や他者理解の自己評価が高い傾向にあったことは、「人々と協働」という点で、部活動、特別活動とも効果がみられたが、さらに多様な価値観や思考を持った人々と結合し、新たな価値を創造するために必要な新規性のある情報をより多く扱える人材を育成するためには、こうした「弱い紐帯の強み」を理解した上で、教育活動に活かすことが必要といえる。

以上、本稿は、部活動を通じた生徒の人間関係形成能力の育成について、部活動を批判的に考察し、特別活動を比較検討した結果、部活動、とくに運動部の効果に対する疑義を提示し、その背景にある課題を提示することができた点に意義がある。また、今後の社会で求められる主体性、協働性の育成の観点から、部活動、特別活動がもつ共通性や差異性を指摘したことは、今後、両者の関係性を整理する視点につながるといえ、本稿の成果といえる。

6. 今後の課題

一方で、課題も残されている。まず、本稿では特別活動をひとまとめにして分析を行なったが、学級活動、生徒会、学校行事等、個別の項目と部活動を比較した場合、異なる傾向が出ることは十分に考えられる。また、今回は紙幅の都合上、運動部を中心とした議論となったが、文化部についても今後、検討を深める必要はある。次に、質的調査の対象を、特別活動に熱心に取り組んだ者のみとしたことである。これにより、部活動と特別活動の違いや部活動が抱える課題を浮かび上がらせる点で有意義ではあったが、全体のサンプル数を増やしながら、中学、高校ともに部活動に所属し部活動を熱心に取り組んだ者への調査を加えることでさらに深い分析につなげることができる。そして、体育

学部学生やスポーツ推薦入学者など運動部経験を自身のキャリア形成を強く結びつけている者への調査も必要といえる。これらについては今後の課題としたい。

【注】

- 1) 内田, 上地, 加藤らは学校の部活動と働き方改革に関する教師への意識調査から, 部活動指導により多くの教員が過酷な勤務にあることや, 専門外の指導を求められ部活動指導にストレスを感じている教員の意識を明らかにした。その一方で, 部活動のあり方に積極的な意義を見出す教員の存在もいるなど問題の複雑さを指摘している (内田 上地 加藤ら 2018)。
- 2) 「説明的デザイン」の特徴は量的調査に重きを置きつつ, 質的調査は量的調査に引き続くように設計されている (Creswell・Plano Clark 2007=2010, pp.79-81)。
- 3) 浜田は体罰の暴力は構造的暴力の具現とし, その構造的要件の3点を①内発的閉鎖性があるが成員が自ら抜き出す選択肢をもてない中で, ②反撃や批判のできない一方的な支配-服従関係が絶対的なものとして成員を囲み, ③成員間に共有されて集団を成り立たせている価値・規範意識としている (浜田 2014, p.62)

【引用文献】

ベネッセ教育総合研究所「第1回部活動の役割を考える 子どもたちに適切な活動の機会を提供するために その2」https://berd.benesse.jp/special/datachild/comment01_2.php : 2018年1月30日アクセス

Creswell, J. W. and V. L. Plano Clark, *Designing and Conducting Mixed Methods Research*, 2007 (大谷順子訳2010『人間科学のための混合研究法 質的・量的アプローチ

チをつなぐ研究デザイン』北大路書房)

- Granovetter, M, S *The Strength of weak Ties* *Amerian lozarnal of Sociology* 78: 1360-138 1973 (グラノヴェッター, M, S. 著 大岡栄美訳「弱い紐帯の強さ」所収 野沢慎司編 監訳 2006『リーディングス・ネットワーク論: 家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房 pp.123-158)
- 浜田寿美男2014「体罰が起こる心理・構造的なメカニズム」『教育と文化』74号
- 林幸克2018「文化部活動の教育的意義」長沼豊編『部活動改革2.0 文化部活動のあり方を問う』中村堂
- 原清治2007『特別活動の探究』学文社
- 今宿裕・朝倉雅史・佐野誠一・嶋崎雅規2019「学校運動部活動の効果に関する研究の変遷と課題」『体育学研究64(1)』pp.1-20
- 国立青少年教育振興機構「青少年の体験活動等に関する意識調査 (平成28年度調査)」<http://www.niye.go.jp/kanri/upload/editor/130/File/report170529.pdf> : 2019年1月23日アクセス
- 河合塾kei-Net 2018「入試難易予想ランキング表」<http://www.keinet.ne.jp/rank/> : 2018年11月15日アクセス
- 神谷拓2009「部活動の教育課程化に関わる議論過程の分析-2001年から2008年までの中央教育審議会の議論に注目して-」『学校教育学研究紀要第2号』pp.21-39
- 神谷拓 菊池幸一2015「体罰・暴力の根絶に向けた運動部活動教育の内容と条件整備-教師の専門性と運動部活動指導の関係に注目して-」『体育学研究60』
- 神谷拓2016『生徒が自分たちで強くなる部活動指導「体罰」「強制」に頼らない新しい部活づくり』明治図書出版株式会社
- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター2011「キャリア発達にかかわる諸能力の育成に関

する調査研究報告書」https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/22career_shiryou/pdf/career_hattatsu_all.pdf : 2020年6月22日アクセス

越良子 高橋智美2019「学級における児童間の紐帯と学級コミュニティ感覚及び信頼との関連」『上越教育大学研究紀要 第36巻第2号』

文部科学省1998「我が国の文教政策－心と体の健康とスポーツ」http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad199801/hpad199801_2_051.html : 2018年12月3日アクセス

文部科学省2013「運動部活動での指導のガイドライン」: 2020年7月1日アクセスhttps://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop04/list/detail/_icsFiles/afieldfile/2018/06/12/1372445_1.pdf

文部科学省2011「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf : 2020年6月22日アクセス

文部科学省2013「第2期教育振興基本計画」http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/jyuujitsu/_icsFiles/afieldfile/2013/05/27/1335529_1.pdf : 2019年2月2日アクセス

文部科学省2016a「第3期教育振興基本計画」http://www.mext.go.jp/a_menu/keikaku/detail/_icsFiles/afieldfile/2018/06/18/1406127_002.pdf : 2018年12月15日アクセス

文部科学省2016b「高大接続システム改革会議「最終報告」」http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/06/02/1369232_01_2.pdf : 2018年12月27日アクセス

文部科学省中学校学習指導要領解説特別活動編2017 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/05/07/1387018_13_2.pdf : 2019年1月20日アクセス

長沼豊編2018『部活動改革2.0 文化部活動のあり方を問う』中村堂

長沼豊 柴崎直人 林幸克編2018『特別活動の理論と実践～生徒指導の機能を生かす～』電気書院

西島央・中澤篤史・羽田野慶子2006『部活動その現状とこれからのあり方』学事出版

蘭千壽 高橋知己2014「創発型学級における信頼研究」『千葉大学教育学部研究紀要第62巻』pp.231-238

内田良2017『ブラック部活 子どもと先生の苦しみに向き合う』東洋館出版社

内田良 上地香杜 加藤一晃 野村駿 太田知彩 2018『調査報告 学校の部活動と働き方改革－教師の意識と実態から考える』岩波書店

(はせがわ まこと 神戸松蔭女子学院大学)

